

## 主 題：目を覚ましなさい

## 聖書箇所：テサロニケ人への手紙第一 5章1-8節

実は、昨日までどうしようかと迷っていました。というのは、この大震災という出来事を前にして、どうしてもごいっしょに考えなければいけないことがあると強く思ったからです。それで今日は、予定していたローマ人への手紙の学びではなくて、テサロニケ人への手紙第一5章から、私たちはみことばを学びたいと思います。

ここで繰り返すまでもありませんが、3月11日午後2時46分に私たちは未曾有の大地震を経験した訳です。昼間だったせいもあって、私たちはテレビを通して現場の様子を見ることができました。あの津波に町が吞まれていく様子、そして、福島原発における水素爆発という出来事を見たときに、私だけでなく多くの皆さんが「この日本はどうなってしまうのだろう…」ということ考えたことだろうと思います。「もうこれで終わってしまうのではないか…」と。この出来事からある人たちは、聖書が教えるようにイエス・キリストの再臨が近いことを改めて確信されたことでしょうか。確かに、イエスはその様にお話になりました。主イエス・キリストの再臨の前に、どのような出来事が起こるのか、そのことを主は教えておられます。

マタイの福音書24章に、イエスは弟子たちから質問を受けたことが記されています。24:3「イエスがオリーブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言った。「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか。」、イエスが帰って来られる前、世の終わりにはどのような前兆があるのか?と聞きます。そこでイエスが言われたことは、まず、偽キリストが現われるということでした。そして、その後でこのように言われました。24:6-7「また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。しかし、終わりが来たものではありません。:7 民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。」。

イエスが言われた三つの前兆、一つは戦争が起こること、二つ目は、世界中に様々なききんが起こること、そして、三つ目に地震が起こることです。確かに、イエスが預言したように、このようなことが私たちの周りに起こっています。「戦争」、今月の6日に国際的な非政府組織(NGO)のオックスファムは、武器を用いた暴力で死亡する人が全世界で一日に二千人以上に上るとの報告書を発表しています。これは大変な数です。また、米メリーランド大学国際開発、また、紛争管理センターは、今世界で起きている26の武力戦争はすべて、以前から続く内戦か、いったんは治まった内戦の再熱である。さらに近い将来、内戦などの紛争が勃発する可能性が高い国が25ヶ国もあり、この2年間で深刻さを増していると言います。今朝も私たちはリビアに対する攻撃が始まったというニュースを聞きました。私たちはもうそのようなニュースを聞いても鈍感になっています。慣れっこになっています。至る所で民族間の争いが起こっているからです。

ですから、確かに、聖書が言っているように、世の終わりの兆候、神のさばきが下る兆候が私たちの前に溢れています。石弘之という環境学者は危機に関してこのようなことを言っています。「中東に限らず世界的に食糧が高騰している。日本でも昨年以來、食用油が15%、砂糖が7%値上がりし、物価の優等生と言われた卵が一昨年に比べて13%値上がりし、5年半ぶりの高値水準になった。この4月から、輸入小麦の政府売り渡し価格を平均18%引き上げることが決まっている。今年は怒濤の値上げラッシュに見舞われると予想するエコノミストが多い。」と。

また、農林水産省も2月に世界の食料需給見通しを発表しましたが、それによると、平成20年には穀物価格が平成8年に比べて、名目で24-35%、肉類が32-46%値上がりすると発表しています。なぜ、このように物価が高騰しているのでしょうか?どうして食料が高騰しているのでしょうか?いろいろな原因がありますが、その中の一つに生産国の異常気象による収穫量の減少を上げています。私たちもテレビで見たように、オーストラリアの東部は建国以來という洪水に見舞われました。つい最近のことです。小麦輸出国のロシアとウクライナではそれぞれ猛暑に見舞われました。オーストラリアでは洪水のために小麦の生産量が予想収穫量の半分に留まっていると言います。ロシアでは、作付面積の約2割に当たる1000万ヘクタールが壊滅状態にあり、今年7月までの穀物の輸出禁止措置をとった、ウクライナも禁輸に同調していると言います。私たちも異常気象を経験しています。食糧の不足が叫ばれています。

聖書が言っているように、終わりの時代になるとそのようになって行くという通り、確かに、世の中

は動いています。地震に関しても、日本地震学会はこのように発表しています。日本及びその周辺では、人間が感じない小さい地震まで含めると、1年に10万個以上、1日平均300個以上の地震が発生している。これは気象庁が震源を決めることができた地震の数であると言います。一日に300個以上の地震、もちろんこれは体に感じない地震ですが、有感地震は1年に1000～1500回余りあると言います。単純に平均すると、1日あたり3～5回あることになる。そして、大地震と言われるマグニチュード7クラス以上の地震についても、過去100年間の発生回数を平均すると、1年間に1回の頻度で発生していると言います。

皆さん、思い出しませんか？数年前、タイの南の島で大津波によってたくさんの方々が亡くなったあの惨事、あれはもう2004年のことです。スマトラ沖のM9.3という大地震によって、22万7千人以上の人たちが死者、行方不明者になりました。翌2005年にはパキスタンで大地震が起き、10万人以上の方が亡くなりました。2008年には中国の四川で大地震が起こり8万7000人が死者、行方不明者として上がっています。2010年には私たちも献金したあのハイチで大地震があり、22万人以上の方が亡くなりました。その1ヵ月後にはチリで大地震が起きて、そして、今年はまだ記憶に新しいあのニュージーランドで多くの人々が地震に巻き込まれました。

私は2～3月にカンファレンスに行ったときに、ここでもメッセージをしていただいたナイジェル先生と教会の方に会って「ニュージーランドは大変ですね。日本人もたくさんの人たちが生き埋めになっているから…」と話をしていたのは帰る矢先のこと、そして、この日本です。確かに、今見たマタイの福音書24章に記されていることが確実に起こっています。だから、私たち信仰者が覚えなければいけないことは、イエスが私たちに教えてくださったように、確かに、世の終わり、神のさばきの日が近づいているということです。そのことは確実です。マタイ24：8を見るとイエスはこのように言われました。「しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。」と、その後もっと大変なことが起こると言っています。そして、そのような惨事が続いた後、イエス・キリストが地上に帰って来ると。24：35には「この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。」とあります。ですから、私たちは今、私たちの周りで起こっている様々な状況を見て、聖書を知っている者として、聖書を信じている者として、このように言うことができます。「主イエス・キリストが警告なさったそのさばきの日は非常に近い。」と。

確かに、そのことを見て取れます。確かに、皆さんもそのことを感じておられると思います。イエスが弟子たちの質問に答えて、このような兆候があると言われましたが、なぜ、イエスはこのようなことを言われたのでしょうか？人々を驚かすためではなかったのです。人々を混乱させるためではなかったのです。なぜ、敢えてイエスはこのようなことを話されたのか？その理由が記されています。24：42-44「だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。：43しかし、このことは知っておきなさい。家の主人は、どろぼうが夜の何時に来ると知っていたら、目を見張っていたでしょうし、また、おめおめと自分の家に押し入れられはしなかったでしょう。：44だから、あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。」と。「だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。」と、これがメッセージだったのです。イエスが何が起こるのかということをお話された上で、弟子たちに伝えたかったことは「あなたは目をさましてなければいけない。」ということです。

「目をさましている」、ここで使われていることばは新約聖書の中に22回出て来ることばです。42節では「目をさましていなさい」、43節では「目を見張って」とありますが、このことばは「油断なく気を配るように、注意を怠らないように、用心して、」という意味があり、また、「眠りから覚める」と、そういう意味をもったことばをイエスはここで使われたのです。そして、そのような意味をもったことばが新約聖書の中に22回あるのです。

**使徒の働き 20：31**：「ですから、目をさましていなさい。私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがひとりひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。」、誤った教えに巻き込まれて行かないためにあなたたちは目をさましていなさい、聖書が何を教えているかをしっかりと判断するために目をさましていなさい、用心していなさい、注意を怠ってはいけませんと、そのような警告があります。

**Iコリント 16：13**：「目を覚ましていなさい。堅く信仰に立ちなさい。男らしく、強くありなさい。」、主のみこころに従い続けて行くようにあなたたちは用心していなさい、注意していなさいと言います。

**コロサイ 4：2**：「目をさまして、感謝をもって、たゆみなく祈りなさい。」、世に関心を払うことによって生じる霊的眠気に対して注意していなさいと言います。世の中に目を向けることによって次第に神が言われていることに対して鈍くなってしまふ、そのようなことがないようにしなさいと言うのです。

**I ペテロ 5 : 8** : 「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのよう  
に、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。」、ペテロはこのように、サタンは信者の  
証を奪おうとしているから、注意していなさい、用心していなさい、目をさましていなさいと言います。

このようにみことばはこのことばを用いて、私たちに様々な警告を与えてくれています。このような  
惨事を経験した私たち信仰者がここで何を考えなければいけないのか？このような中で私たちはどのよ  
うに考えて、どのように生きて行くべきでしょうか？それは次のことです。「私は主に会う備えができて  
いるのかどうか？」です。このような大惨事を経験して、信仰者であるあなたが考えなければいけない  
ことは「私は今日主に会う備えができていますのかどうか」、そのことを考えなければいけないのです。  
私たち被災を免れた者たちが「神さま、感謝します。私たちの地域にこのようなことが起こらなくて  
…」と、もしそうであるなら私たちは大切なポイントを見落とししています。なぜなら、あの惨事はここ  
で起こってもおかしくなかったからです。今、私たちが避難所生活をしていてもおかしくなかった、今、  
私たちが出て行って家族を捜してもおかしくなかったのです。彼らが私たちよりも罪深から神が  
さばいたのではないのです。私たちが考えなければいけないことは、なぜ、私たち罪人がこのように暖  
かいところで食べ物に不自由することなく生活できているのかということ。私たちが考えなければ  
いけないことは、被災者であってもそうでなくても、私たちは今日、この日に主イエス・キリストにお  
会いする備えができていますのかどうかということです。そのことを考えていなかったら、私たちはこのよ  
うな大変な歴史上類のない惨事を経験して、一番大切なレッスンを見落とししたことになるのです。パウ  
ロは言います。「眠っていないで目をさましていなさい」と。そのように彼は勧告するのです。

### ☆パウロが教える「主に会う備え」のできた生き方について I テサロニケ 5 : 1-8

そのことが記されているのが I テサロニケ 5 章です。パウロはテサロニケの教会に送ったこの手紙の  
中で、4 章 13 節から 18 節まで「空中再臨」という私たちクリスチャンが待望している出来事につ  
いて記しました。私たちクリスチャンは空中でイエスにお会いすること、イエスが私たちを迎えに来て  
くださるその日を待望しています。そして、それを語った後、5 章に入っていくのです。1 節に「兄弟  
たち。それらがいつなのか、…」とありますが、新改訳聖書では「それらが」と訳されています。これは  
「さて、ところで」という接続詞です。つまり、パウロはすでに語った「空中再臨」の出来事と、これ  
から語る「主の日」という出来事との関連性を認めているのです。別のことを話そうとしているのでは  
ありません。空中再臨の話をしてきたパウロは、これから「主の日」というさばきについて話をするの  
です。それらが関連していることを明らかにするために、パウロは敢えてここで「さて、ところで」と  
いう意味の「それらが」ということばを用いたのです。

5 章 1 節から神のさばきである「主の日」を語ろうとしているパウロが、なぜ、空中再臨の話をする  
のでしょうか？なぜなら、空中再臨は「さばき」ではなくて、私たち信仰者にとって祝福だからです。な  
ぜ、それを含めるのでしょうか？それはこの「主の日」というその出来事の中に空中再臨が含まれるから  
です。「主の日」というのは、空中再臨で始まり地上再臨で終わる 7 年間のスパンが含まれています。  
その期間が含まれているのです。「主の日」は空中再臨で始まります。そして、イエスが地上に帰って  
来られることによって終わるのです。そのときに神の審判が下されるのです。

パウロはこの「主の日」の到来に対してどのように日々を過ごすべきなのか、そのことを教えていま  
す。私たちが学ばなければならない「主にお会いする備え」を、私たちはこの箇所を通して学ぶことが  
できます。みことばは私たちに言います。「主に会う備えをしなさい!」と。それはどのような生き方  
でしょうか？パウロが教えてくれます。ごいっしょにこのみことばを見て行きましょう。

#### A. 主の日のとき 1-2 節 : いつそれが訪れるのか？

まず、その生き方を説明する前にパウロは、この「主の日」のときについて、何時それが訪れるのか  
という、私たちが持っている最大の疑問に対して答えを与えてくれます。1-2 節「兄弟たち。それらが  
いつなのか、またどういう時かについては、あなたがたは私たちに書いてもらう必要がありません。:2 主の日は  
夜中の盗人のように来るといふことは、あなたがた自身がよく承知しているからです。」。

・夜中の盗人のように＝ (1) 前触れがない (2) 予期していない

パウロはここでいくつかのことを教えています。「主の日」がいつやって来るのか？私たちには分か  
らないと言います。ただ、何の「前触れもなく」その日がやって来ること、しかも、「予期していな  
い」ときにその日がやって来ることをパウロは警告しています。「夜中の盗人」と記されています。夜  
中に入ってくる盗人は前もって予告しません。予期しないときに入ってくるものです。

「主の日は夜中の盗人のように」と、これが一つの例えです。そして「来るということとは、」とあります。  
この「来る」ということばをパウロは現在形を使っています。敢えて、未来形を使わなかったのです。  
それはこれが今にも起こる出来事だからです。いつ起こってもおかしくない出来事だからです。ですか

ら、パウロは敢えて現在形を使ったのです。ですから、少なくとも、この「主の日」がいつ来るかという質問に対して言えることは「私たちにはいつか分からない。しかし、今日起こってもおかしくない。」ということです。パウロはそのように信じて二千年前生きました。二千年間、神はあわれみをもって、そのさばきの日が来るのを待っておられます。留めておられます。それは一人でも多くの罪人が悔い改めてこの救いに与るためです。この中にイエスを信じていない方がおられるなら、神はあなたのために待っていてくださるのです。この救いをいただくようにと、忍耐をもって神は待っておられます。しかし、必ずさばきは来ます。何の前触れもなく、人々が予期していないときに…。

## **B. さばき 3節 : 突如として滅びが彼らに襲いかかります**

3節から「さばき」についての三つの教えを見ることができます。「人々が「平和だ。安全だ。」と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。」、

### **1. 予期せぬ時 : 「突如」**

先ほども見ましたが、さばきは予期せぬ時に起こる、「突如として」とパウロはこのように言っています。このことばをパウロは非常に強調するのです。しかも、「人々が「平和だ。安全だ。」と言っているそのようなときに、」と。人々は「平和だ」と言っているのです。不安を抱かせるものが何ひとつない、「平和だ。安全だ」と。私たちには敵がない、どんな危険も周りに持っていない、だから、安全だと。私たちの国はそうではないですか？国によってはいつ侵略されるか分からないという、そのような危機感を持っている国がたくさんあります。私たちはそのようなことはありません。平和です。どこからも攻められることもないでしょうし、また、何か不安があるか？ありとあらゆるものは十分に与えられています。だから、多くの人は自分の身には何も起こらないと思込んでいます。「自分は安全だ！」と。しかし、みことばが教えることは、知らない内にこのようなことがあなたに襲いかかるということです。

多くの場合、私たちは死について考えません。若ければ「私はまだ何十年も生きる」と思っているし、最近はその平均年齢も上がってきましたから、「まだまだ元気だ、まだまだ生きていける」と思っています。しかし、私たちはこのような出来事を見たときに「明日は分からない」と思います。皆さん、そう思いませんか？地震が何となく南下して西の方へ向かっている様子をテレビが報道したとき、警告されているように南海大地震がやって来るのではないか？この地方にも大きな地震が起こるのではないかと、そのように感じたときに初めて、いろいろな恐れを抱くのです。

人間は自分の愛する者が死を迎えた時に初めて死について考えるという、愚かな者です。明日のことが分からないのに、あたかも明日も明後日も確実にやって来ると信じて生きています。気付かなければいけないのです。目をさまさなければいけないのです。明日のことはだれも分からないのです。今日が終わりかもしれないのです。パウロが警告したのは、人々が「大丈夫だ、何も起こらない。」とそのように言っているときに、突如として、滅びが襲いかかる、予期せぬときに突然それが起こるということです。

### **2. 滅び : 「滅びが襲いかかる」、滅びがある、さばきが来る**

パウロは確実にそのような滅びが来ることを予告しています。その滅びについてパウロはⅡテサロニケ1:8-9でこのように記しています。「そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。」、明確に、神の審判、さばきが下ることを約束しています。どのような人に下るのですか？「神を知らない人々」と言います。つまり、この創造主なる真の神を信じていない者に対する警告です。しかも「私たちの主イエスの福音に従わない人々」とあります。神があなたのために備えてくださった、神ご自身のいのちをもって備えてくださったこの救いに、背を向けて拒み続けて、信じないで神に逆らい続けている、そのような人がここに上げられている対象です。神は必ずあなたの罪に対して報復なさると言います。「:9そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。」と明確に約束されています。主イエス・キリストの救いを信じていない人たちのその永遠がどうなるのか、聖書は明確に言っています。その人たちには「永遠の滅びの刑罰」が待っているのです。彼らには地獄が待っているのです。逃れることのできない、終わることのない苦しみがその人たちに訪れます。永遠に終わることのない苦しみです。「なぜ、そのような目に私が遭うのでしょうか？」…、神の救いを拒み続けたからです。神の前に罪を犯し続けたからです。神の警告に耳を傾けなかったからです。

### **3. その確実性 : 「妊婦に産みの苦しみが臨むようなもの」**

パウロは滅びの確実性を次に語ります。妊婦の例えを用いて彼はこう言っています。3節「ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。」と、陣痛や出産の苦しみは妊婦にはつきものです。それを逃れることはできないと。つまり、これらのことは確実に神に逆らっている者たちに起こると、その警告をパウロは記しているのです。絶対にこのさばきから逃れること

はできないと言います。もし、この中にまだイエスを信じておられない方がいるなら、ぜひ、この警告に耳を傾けてください。神はあなたに警鐘を鳴らし続けておられます。「さばきが来る」と。救いが与えられるその機会がある内に、あなたの罪が赦されるその救いが与えられる恵みの中にいる今、このすばらしい救いに与ってください。

同時に、信仰者の皆さん、今一度、私たちはこの真理に目覚めなければいけません。今回の地震でいろいろな人たちに対するインタビューがテレビや新聞を通して流れました。ショッキングだったのは、あるご主人が自分だけ助かっていっしょにいた奥さんが助からなかったことです。「もっと必死になって彼女を連れ出したら…、彼女は残ると言った、でも、それではいかんと彼女を無理矢理にでも連れ出していたら…」と、彼女は津波にのまれて死んでしまったのです。信仰者の皆さん、永遠の地獄に向かっている愛する者たちが私たちの周りに山ほどいます。あなたの愛する者たち、あなたの友人たちの中でどれ程の人たちが永遠の地獄に向かっていますか？津波が来ると言っても多くの人たちは信じなかった。でも、来たのです。神のさばきが来ると言っても多くの人たちは信じません。でも、来るのです。それを知っている私たちにできることは、彼らにそのことを伝えるだけでなく、願わくは、彼らがそこから出て来ることです。救いの場所へと出て来ることです。

私たちにはしなければならないことがあるのです。神は言われます。「目覚めなさい！あなたは何をしているのだ。このような現状の中にあって何をしているのだ！」と。

### C. 救い 4-5節

4-5節を見ると、今度は「救い」のことに移って行きます。「さばき」がある、しかし、「救い」があると。特に、ここには救われているクリスチャンの特徴をパウロは記しています。つまり、救われているあなたたちはこのようなさばきを恐れる必要がないと、パウロはそのことを言いたいのです。4-5節「しかし、兄弟たち。あなたがたは暗やみの中にはいないのですから、その日が、盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。:5 あなたがたはみな、光の子ども、昼の子どもだからです。私たちは、夜や暗やみの者ではありません。」、確かに、パウロはここで救われている者たちの特徴を教えています。否定的に、そして、肯定的に。

#### 1. 信者の特徴：否定的

- a) 暗やみの中にはいない
- b) 夜の者ではない

#### 2. 信者の特徴：肯定的

- a) 光の子ども
- b) 昼の子ども

否定的には「あなたがたは暗やみの中にはいない」「私たちは、夜や暗やみの者ではありません。」と言います。この「暗やみ」や「夜」はどちらも「罪、悪」を表わす表現です。ですから、パウロは「あなたがたはもうそのような中にいない。却って、あなたがたはそこから救い出されたゆえに、あなたたがたは光の子どもであり昼の子どもです。」と肯定的に言います。「闇と夜」と「昼と光」が対比されているのです。かつての私たちはみな、暗やみの中におり、そして、夜が私たちの特徴でした。つまり、罪、悪が私たちの特徴だったのです。私たちはそこから救い出されたのです。そして、私たちは「光の子ども」となり「昼の子ども」へと変えられたのです。つまり、光である神と和解したのです。光に属する者になったから、私たちは「光の子どもであり、昼の子ども」なのです。そのようにパウロは言います。私たちは生まれ変わっている、だから、私たちはこのようなさばきを恐れる必要はないと言うのです。

### D. キリスト者の生き方 6-8節

6-8節を見ると、では、光の子どもとされたあなた、昼の子どもとされたあなたはどのように生きて行くのか？その生き方について教えています。「ですから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして、慎み深くしていきましょう。:7 眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うからです。:8 しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの望みをかぶるとしてかぶって、慎み深くしていきましょう。」。二つのことがあります。一つは「目をさましていなさい」、二つ目は「慎み深くしていなさい」です。これが私たちクリスチャン、この世の終わりに臨んでいる私たちが、どのように生きるのかというその生き方です。

#### 1. 目をさましている

「目をさましている」ということに関して、パウロはまたここで否定的なメッセージと肯定的なメッセージを与えています。否定的、つまり、「このようにしてはいけない」ということ、肯定的なメッセージは「このようにしなさい」と言います。

##### a) 否定的

パウロがここで「してはならない」というのは、未信者のように、イエスを知らない人たちのように生きてはいけないということです。「ほかの人々のように眠っていないで」とあるからです。「ほかの人々」とは「光の子ども」ではない人たちのことです。「昼の子ども」でない人たちです。まだ、やみの中に留まっている人たちのことです。まだ、救いを受けていない人たちです。その人たちのように「眠っていないで」というのです。つまり、彼らは「眠っている」と言うのです。なぜでしょう？彼らはこのようなさばきがあるというメッセージを聞いてもそれに対して心を開こうとしないからです。深い眠りにについている者たちは多少の物音があっても起きません。そのような状態なのです。神のさばきについて、そのメッセージを聞いても無関心なのです。関心を払わないのです。彼らは快樂のままに生きて、その罪を神の前に悔い改めようとしません。そのような生き方を止めなさいと言うのです。ここには禁止のメッセージが記されているのです。

#### b) 肯定的

同時に、このように生きて行きなさいというメッセージが続きます。「目をさましていなさい」というメッセージです。「目をさまして」は現在形を使っています。目をさまし続けるという継続した態度をパウロはここで教えるのです。つまり、私は今日、主にお会いする備えをし、もし、神が明日をくださるなら、そのような備えをして明日を生きて行こう、そうして生き続けるということです。また、別の言い方をすれば、今日、神が喜んでくださることを進んで選択して行く生き方です。神が何を喜ばれるか、何が神の前に正しいのかを考えて生きて行く生き方、それが目をさまして生きる生き方なのです。神のメッセージにしっかりと目を向けて、耳を傾けて、そして、そのメッセージに従って生きて行こうとする。神が喜んでくださることを自ら進んで選択して歩んで行こうとする、そのような生き方をパウロは教えるのです。信仰者の皆さん、そのように生きて行きなさい、しっかりとみことばに立って、いつも「主よ、どうぞ私に教えてください。何があなたの前に正しいことなのか、何があなたの前に喜ばれることなのかを正しく判断して、正しい歩みができるように私を助け導いてください。私はあなたの栄光を現わしたいから、そのように私を助けてください。」と、私たちはそのようにして生きて行くのです。でも、失敗します。そのときは悔い改めて、また、神の前に正しく生きて行こうとすることです。目をさまして生きて行きなさい！と。

### 2. 慎み深くしている

ここでも否定的なメッセージと肯定的メッセージがあります。

#### a) 否定的

「してはならない」という禁止のメッセージが7節にあります。「眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うからです。」、「酔う」、つまり、酔っている人は自分で自分をコントロールできません。何が正しいのかというその分別ができません。自制心がなくなっています。つまり、この人たちは神の前に何が正しいのか、それが判断できない人です。そのようなことがあってはならないと言うのです。却って、分別をもって自制心をもって生きなさいと言うのです。なぜなら、「慎み深く」ということばは「分別がある、自制心がある」という意味をもっているからです。ですから、アルコールに呑まれている人たちにはそれがありません。アルコールの支配、アルコールの力によって、自分自身に自制心がないから、何が正しいのか判断できないのです。しかし、パウロが教えていることは、主に会う備えをしている人の生き方は、どんな時でも何が正しいのかその分別ができますから、そのような生き方をしなさいということです。

#### b) 肯定的

8節でこのようなメッセージを加えています。「しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの望みをかぶととしてかぶって、慎み深くしていきましょう。」、今度はすべきことが記されています。

#### (1) 信仰と愛を胸当てとして着ける：

- ・信仰＝神に対する揺るがぬ信頼です。イエスを信じるだけではない、創造主なる神を信じるだけではない。この神のおことばを信じ、その約束を信じて、そして、正しく歩んで行くことです。イエスを信じた皆さん、どうぞ、神のおことばにしっかりと立って歩んでください。神のおっしゃることしっかりと立って生きてください。パウロはそのことをここで言っているのです。
- ・愛＝神の戒めの中で最も大切なものは何でしたか？神を愛すること、隣人を愛することです。そのように私たちは神が望んでおられることを実践して行こうとするのです。

#### (2) 救いの望みをかぶととしてかぶる

- ・将来の望み＝そのような胸当てを着け、そして、頭にかぶとをかぶりなさいと言います。その「かぶと」は「救いの望みを」とあります。救い、罪からの救い、そのことを言っているわけではありません。

「救いの望み」とは先のことです。「救い」とはイエスを信じたなら罪が赦されて義とされます。救われた後、神はその人を聖く変えて行かれます。そして、最終的に、その人を栄光のからだへと変えてくれるのです。この「栄化」という出来事のことをパウロは言っているのです。つまり、クリスチャンであるあなたの周りには、日々、いろいろなことが起こって来るけれど、あなたの目をしっかりとその永遠に向けなさいと言うのです。イエスにお会いしてあなたが栄光のからだをいただく、そのときをしっかりと覚えて今日生きて行きなさいと言っているのです。

なぜなら、私たちはすぐに周りの出来事に目を奪われてしまうからです。そして、私たち信仰者に与えられた永遠の希望から目を逸らしてしまうのです。だから、しっかりとそこを見ていなさいと言うのです。あなたにはすばらしい天国が約束されている、あなたにはすばらしい栄光のからだがある約束されているのです。私たちはいつまでもこの罪のからだをもって生きるのではないのです。罪を犯すことのないキリストに似た栄光のからだをいただいて、そして、神とともに永遠を過ごすのです。ですから、しっかりと永遠の希望を見据えて今日生きて行くのです。あなたはそのように生きるべきです。そのように生きなさいと神はあなたに命じておられるのです。

非常に面白いことは、この「着ける」と「かぶる」とここには二つの動詞があるのではなく、一つの動詞を使っていることです。この動詞の時制は現在形ではなく、もうすでに起こったことです。つまり、イエスを信じたあなたにはもうこの胸当てが与えられ、かぶとが与えられたのです。パウロはここで、そのようなものをあなたがいつか失ってしまうということを言っているのではありません。あなたにはもうすでにそれらが与えられたゆえに、あなたはしっかりと自分の内側の大切なものを守って行きなさい、心を守っていきなさい、あなたの考えを守っていきなさい、誘惑が多いけれど、しっかりと自分を守りながら、神が喜んでくださることをやって行きなさいと言うのです。感謝なことに、それは神の助けによってできるのです。どんな時にでも、何が神に喜ばれるのかを考えて生きる信仰者になってください。それが主に会う備えをした信仰者です。

さて、あなたは、今日イエスに会う備えができていますか？今日が地上における最後の日とするなら、あなたはイエスにお会いできますか？そして、お会いして、イエスから喜んでいただけますか？ルカの福音書12章に、婚礼に出かけた主人を待つようにという命令を受けたしもべのことが記されています。「たとえ」ですが、12:35-40「腰に帯を締め、あかりをともしていなさい。」、いつ主人が帰って来てもよいように備えをしているということです。なぜなら、これはもうすぐに動けるという状態です。「:36 主人が婚礼から帰って来て戸をたたいたら、すぐに戸をあけようと、その帰りを待ち受けている人たちのようでありなさい。:37 帰って来た主人に、目をさましているところを見られるしもべたちは幸いです。」、イエスが帰って来られる日を待ち望みながら生きている信仰者には、神の豊かな祝福があると言うのです。「まことに、あなたがたに告げます。主人のほうで帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばにいて給仕をしてくれます。」、主人がこのようなことをするのです。主人である神があなたをこのような祝福に招いてくださるのです。なぜなら、この人たちは今日を無駄にしなかったのです。

主人が帰って来るのはまだ先だと思っていた悪いしもべのこと、「:38 主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、いつでもそのようであることを見られるなら、そのしもべたちは幸いです:39 このことを知っておきなさい。もしも家の主人が、どろぼうの来る時間を知っていたなら、おめおめと自分の家に押し入れはしなかったでしょう。:40 あなたがたも用心していなさい。人の子は、思いがけない時に来るのですから。」、そのようなしもべであってはならない、今日、主人が、イエスが帰って来るかもしれないという、そのことをしっかりと覚えて、今日、イエスにお会いする備えをすることです。

信仰者の皆さん、私たちが考えなければいけないことは、どのようにして今日を生きるかということです。その答えを今出すことです。私たちは「もう少し考えてから、もう少し先に…」と言いますが、その結果、何が起こるか？無駄な時間を過ごすのです。「もう十分です。目覚めなさい。目を覚ましなさい。」と言います。そして、神がくださった今日という日を、しっかりと備えをもって神の前に正しく生きなさい。神が喜んでくださることを選択しながら今日生きていきなさいと。そうでなければ、後悔が残るのです。そのような人生をだれが生きたいでしょう？過去はもう戻って来ません。今日が与えられています。今日、私たちは変わることができる、そして、もし明日が与えられたら明日もそのように生きて、神の前に価値ある人生を生きることができます。そうして生きることで、信仰者の皆さん。

大変な大惨事です。苦しみは続きます。しかし、私たちがしっかりとこのときに学ばなければいけないレッスンを学んでいなければその方が悲惨です。しっかりと学ぶべきことを学んで、主の前に正しく歩んで行きましょう。

《考えましょう》

1. あなたは主の再臨を心から待ち望んでおられますか？
2. パウロは主イエスの再臨を「祝福された望み」と呼び、それがキリスト者に与えられたすばらしい祝福であると述べています。しかし、クリスチャンだと告白している人の中にそのように感じない人がいることも事実です。その理由はどうしてだと思いますか？
3. 再臨に対する備えが出来ている人の生き方をご自分のことばで挙げてください。
4. そのような生き方を継続するために、信者はどのように関わり合っていくべきでしょうか？